

(学生記者 吉野仁美)

西藤輝(さいとう・あきら)さん、64歳。総合政策研究科博士課程前期(修士)を総代で修了し、4月から後期(博士)に進んでいらっしやる。じつは住友商事理事などを歴任、国際ビジネスの最前線にあった人である。企業の現場から学問の道に入って感じるものは……総政の小さな後輩として、お話をうかがった。



——企業で活躍なさっていた時と、大学院で研究に専念されているいまとは、企業を見る目に変化はありましたか。

西藤 企業が、より具体的にわかるようになりましたね。学問の世界から日本企業の良さや問題点などをとらえていくと、21世紀、日本企業はこうあるべきだというイメージ像が、客観的に考えられます。喩えて言えば、私はこれまでボクサーだったのです。ボクシングの世界で戦ってきた。いまの私は大相撲の世界に生きているということが出来ます。

の視点から見ると、ビジネスの世界がよりよくわかるようになってきましたね。

《80年代のはじめ、シベリアの天然ガスを西ドイツへ供給するパイプライン・プロジェクトを、住友商事を含む日本企業各社が欧米を制して受注していった。1回の契約が100億円超の世紀のプロジェクトである。西藤さんはその中心メンバーのひとりとして、情報を入手・分析し、モスクワ・ドイツ―東京間をXマスや大晦日もなく飛び回った日々のドラマを、「経営倫理」(第23号)に書いている。迫真の国際ビジネス小説を読む趣があった》

——ビジネスの世界の厳しさとアカデミックの世界、違いを感じることはありますか。

西藤 ルールやしきたりの違いはありますが、共通点もあります。私はビジネスの世界でたくさんの人と交わり、共同で事業を成すことを非常に楽しんできました。毎日がとても楽しかった。苦になることなど全くありませんでした。そしていまの学問の日々も非常に楽しく過ごしています。両方とも楽しいという点で

実業界から学問の世界へ

西藤 輝さん

——企業の第一線から大学院へ。そのきっかけや理由は何だったのでしょうか。

西藤 福沢諭吉は『文明論之概略』のなかで「一身にして二生を経るが如く」と言っています。彼は西洋という異質の文化に触れたがために、^{あたら}かも2つの人生を生きているように捉え得たのでしょう。私もビジネスマンとしての生活は満喫しましたの

で、違う視点から企業を見てみたいというごく自然な気持ちがありました。それが、退職後を学問の世界で過ごす道につながったということですね。

《西藤さんは1961年本学経済学部卒。イラン住友商事取締役社長、住友商事理事、住商機電貿易代表取締役専務などを歴任。海外駐在はドイツを含め4カ国、12年に及ぶ》

私はこれまでボクサーという視点で企業を捉えてきた。しかしいまは中央大学大学院という大相撲の世界から企業社会を見ている。同じ格闘技という分野、つまり同じ企業社会がテーマではあるけれどもルールもしきたりも全く違う世界。ルールが違えば、当然視点も変わり、学問的に要求されることもビジネスの世界とは異なります。このような二つ目

共通していませんね。

——現代の大学教育への注文はありますか。

西藤 大学に限らず日本の企業や政府、官庁等を含めて考えますと緊張感が欠けているという問題はありますね。弛緩が企業風土となつていくところに未来はないと考えます。大学も同じでしょう。

私が勤務した企業やトヨタなど成功する企業は健全な緊張感に満ちている。誰もが規律をいい意味で遵守しつつ、互いに鍛錬しあうということが、企業風土となり成功につながるのです。日本の伝統的な文化の中で生活していくことは楽なんです。でも大学も企業も政府もいつまでも居心地のよい楽な環境にいては芯がなくなり駄目になってしまいます。

日本人はもともと情緒的で、米欧的な意味での闘争心がありません。しかし競争原理の近代社会においては闘争心が重要な成功の要因です。瀬戸内海の暖かい波だけではなく、太平洋の荒波にもまれることが必要なのです。企業や大学では、健全な緊張感や闘争心の文化が、特に現代の日本のために必要ではないでしょう。

うか。

——最近の日本企業の不祥事についてどう考えていらっしゃいますか。

西藤 私は日米中の企業不祥事の比較研究をしています。日本企業の不祥事は企業風土の中に規律がない、緊張感がないという点に原因があると思います。「経営弛緩」ですね。日本は「以心伝心」「阿吽あうんの呼吸」の社会ですから、実際に問題が起き

昔ボクサー、今は大相撲です

たときにその責任をとり、処理する

風土がなくなっているところがあります。さらに問題なのは、「全てが会社のため」という意識にあると思います。自分の私利私欲のためではなく会社のためにやっているのだという意識が、不正行為に対する自らの罪悪感を希薄化させている。社会正義より「お家重視」に問題があります。21世紀、日本の企業倫理が心配です。

——ところで、大学で学ぶ学問は実際の社会の中で役立つものなのでしょうか。

西藤 例えば法学なら実学ですか

らかなり早い機会に役に立つでしょうね。でも総合政策であるとか経済経営について研究している場合には、それが実務的に直接役に立つことはなかなかないかもしれませんね。しかし学問をする中で大切なのは、教わることでなくて、ある課題に直面したときに、その本質を見抜き、問題を解決する能力を鍛えることだ

と思いますよ。

《大学院で学ぶ傍ら、西藤さんは中央大学経済研究所客員研究員として講義に立つこともある。また米・聖トーマス大学客員研究員もつとめる》

——企業人の経験と立場からいまの学生への望むことはありますか。

西藤 どの企業でも、依存心や情緒性に対して、いい意味での闘争心があり、やる気に満ち溢れた人材を求めています。ですから学生時代には何かひとつでも自分を鍛えること。そうした中で互いにコンフリク

トしかねない複数の価値を追求していつてもらいたいと思います。そして自分の専門に関してほどこまでもその専門性を追求していつてほしい。さらに、英語については徹底的に勉強してもらいたいですね。英語はもはや外国語ではないのです。コミュニケーションの手段として英語を使うことは異文化を理解することができると同時に、より質の高い情報を手に入れることができます。異文化との触れ合いにより触発される点も重要です。

——最後に中央大学で学ぶ学生たちに一言お願いします。

西藤 西欧の競争社会に比べて、日本はやはり依存心の社会ですからね。日本人の「甘えの構造」ではなく、必要なのは「自立・自助・自己責任の生き方」でしょう。傍ら他者への優しさ、思いやりでしょうね。

* * *

海外での仕事があった西藤さんのお話は、ときに英語や中国語、ロシア語までも飛び出した。緊張しながらも、「ボクサーと大相撲」の比喩に富んだ話など、とくに興味深うかがいました。